劇団綺畸2021年度夏公演

勿忘草

作・演出　西山珠生

2021.06.12(Sat.)
於　萬劇場

劇団綺畸2021年度夏公演

勿忘草

作・演出　西山珠生

キャスト

茉莉奈	大坪久茉莉
杏	内藤遥香
桂	橋本竜一郎
橘	栫伸太郎

あらすじ

大きな街のどこか、とある小さな雑貨店、Myosotis。
そこには古い本があり、壊れかけた楽器があり、遠くの国の玩具が、
ほこりをかぶった装飾品があり、美しい人形がある。
店主は品物を並べ、店を開ける。お気に入りの場所に身体を沈めて人を眺める。
女が店を訪れる。たわいない言葉を交わし、こいびとの待つ家へと帰っていく。
花屋は携帯電話を手にせわしなく行き来し、あるいはけだるげに座り込む。
少女がほほえむ。のばされた手がその頬をなぞる。
愛しい。心から愛しい。どうしても。
怖い。私はひとり老いていく。
わたしを忘れないで――。

ご挨拶

なにかに溺れるって、深い淵のようなものだと思いませんか？背丈の何倍も何十倍もある、くらいくらい水をたたえた淵です。ゆったりと揺蕩う、あるいは鏡面のように静謐な、あるいは水面下で激しく渦巻いている、そんな淵です。
ふとしたときに足を踏み外してはまり込む人もいれば、自分から飛び込む人もいる。泳いでいったものの力尽きる人もいるかもしれない。そしてまた、淵を目の前に足を踏み下ろせない人がいる。決して淵には近づかない、転びかけたらすぐに立ち上がれる人もいるでしょう。
『勿忘草』を作りながら、そんなことを考えていました。
あいする、と、いうとき私たちはなにを見ているのでしょう。いとしい、と、いうとき私たちはなにを思うのでしょう。私にはわかりません。
くるしいほどに幸せだ、と、いうとき……私のことはわかりません。あなたのことはもっとわかりません。そう、いうならば――私がビル街の上空に雲の流れるのを眺めるとき、あなたの見ている景色ではニシンが捌かれているかもしれない。そうではないとどうしていえるのか。そういうことなのです。

本日は２０２１年度夏公演『勿忘草』にお越しいただき、誠にありがとうございます。この一時間半を皆様とご一緒できることはこの上ない幸いです。どうぞお楽しみください。

作・演出　西山珠生

登場人物

茉莉奈
かわいらしく、優雅。そして儚げ。時に驚くほどの色香、人を惑わす香りをみせる。自分の魅力を知っている。彼女は、彼女に語りかけるひとの分、表情を持っている。そしてまた、彼女自身のものも？

杏
慎ましく平和に、必要以上に他人と関わらず、ひとり暮らしていた。彼女にも家族はあったのだろうが、もはや忘れてしまった。一見独立しているようだが、ふとしたところでおもちゃを握りしめる子どもがのぞく。そんなとき彼女が見せる淋しい陰は、どこか目を惹きつける。そこに垣間見えるくらい情熱。

桂
挫折の記憶は彼の奥深くに刺さっているのだろうが、見ないふりをしているのか。このまま頭を空っぽにして生きていきたいと思う。仕事があって、時間があって、ちょっと気になる女の子がいればそれでいい。でもやはり何かが足りない、欠けているなにかは彼に愁いを帯びた顔をさせる。

橘
静かにゆったりと、様々なものごとを語る。また時には誰かの話をただ聞いている。そうしていないと不安だからかもしれない。過去を捨てようとしつつも過去に縋り付いている。世界の遥かかなたをみているような眼をするとき、彼はなにを見、聞いているのだろう。

スタッフ

舞台監督	加藤葉月
舞台	加藤葉月
	大澤麗奈
	小椋桃花
	川島尚丈
	北村章吾
	斉藤　楓
音響	牧野　想
	今野太郎
	古橋萌衣
照明	音田優輔
	新井　結
	井上竜成
	田中佑弥
衣裳	斉藤　楓
	柴田栞里
	西沢美春
宣伝美術	柴田栞里
	西山珠生
制作	安部一紗
	城戸はなね
小道具	大澤麗奈
	大坪久茉莉
	小椋桃花
	川島尚丈
	牧野　想
映像	田中佑弥
	新井　結
	音田優輔
	加藤葉月
	北村章吾
	佐々木万羽
Web	栫伸太郎
	今野太郎
	内藤遥香
	橋本竜一郎